

【北海道】「常勤医の半数近く」女性医師が活躍する在宅注カクリニック-今井浩平・いまいホームケアクリニック院長に聞く◆Vol.1

2021年12月24日（金）配信 m3.com地域版

在宅医療に力を入れつつ、年中無休で外来診療も行う珍しいクリニックが札幌市にある。「いまいホームケアクリニック」はスタッフ約80人を擁し、常勤医12人のうち女性医師が5人と半数近くを占める。在宅医療に対して「ワークライフバランスを保ちにくい」イメージを持つ医療者もいると想像されるが、なぜ同院では女性医師が活躍できるのか。脳神経外科から在宅医療に挑戦した今井浩平院長に転身の理由や経営のポイントを聞いた。（2021年12月3日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

——まずは、いまいホームケアクリニックの概要についてお聞かせください。

当院は、在宅医療に力を入れつつ外来診療も行っているクリニックです。札幌市中央区の本院で外来診療を行い、同市南区の分院を在宅医療の拠点としています。スタッフ数は約80人で、常勤医が12人、非常勤医が4人います。常勤医のうち半数近くの5人は女性の医師です。患者さんの数は外来が1日約50人で、在宅医療として対応している方が約420人です。訪問先の比率は居宅が7割、施設が3割です。月に10～12人を看取っています。

開院からの大きな動きとしては、2011年に在宅医療を専門にするクリニックとしてスタートし、2017年に本院を現在の場所に移して年中無休の体制で外来診療を始め、同時期に分院を開きました。24時間365日の往診や訪問看護が可能など、在宅医療の体制が整備された「機能強化型在宅療養支援診療所」に認定されています。



今井浩平氏（本人提供）

——ホームページによると、先生の専門は脳神経外科だと見受けられます。なぜ、在宅医療を始めたのですか。

患者さん一人一人に向き合い、患者さんの人生に関わっていきたくったためです。私は2005年に札幌医科大学を卒業後、臨床研修を経て脳神経外科を専門にしました。同科を選んだのは治療から退院まで一人で診られる完結性の高さに引かれてのことでしたが、現実には想像とは違いました。過去に勤務した病院では、患者さん一人一人に向き合う時間が取れなかったのです。

まず、外来では診療に5分割れるか割けないかといった場合がほとんどであり、また病棟では多職種で入院患者さんを支えていくので、医師として関わるのは手術がメインになります。手術の方針などを話す機会がありますが、患者さんの病気に対する思いや生活背景などをじっくり聞くのは難しい状況でした。私が勤めた病院の脳神経外科が脳梗塞などの手術に特化していたことも関係しますが、数年働くなかで、「このままだとスペシャリストとして部分的に介入することはあっても、患者さんの人生に深く関わることはないだろう」と考え、医師をこの先20年、30年と続けていくことを見据えた結果、違う道を進むことを決めました。そして、私の希望に合っていそうな在宅医療に挑戦し

ようと思い、札幌市では早くから在宅医療を行っていた「ごう在宅クリニック」の中嶋豪先生に師事して在宅医療を学び、開業しました。

——在宅医療を始めての感想はいかがでしたか。

病院の医療とは違うので、始めるまでは自分が向いているかどうかは分かりません。正直なところ、「合っていないと思ったらまた別の道を探そう」とも考えていましたが、結果的には始めてすぐに自分にフィットする手応えを感じました。在宅医療では患者さん一人一人に時間を取って会話ができ、また生活のコーディネートや最期に向けた方針のすり合わせなど関わることが多く、密度も濃いものでした。開業までに看取りも経験しましたが、患者さんの人生に寄り添っていく在宅医療は治療が中心である病院の医療とは全く違っており、天職とまではいかずとも自分の考えやキャラクターに合っていると思いました。

脳神経外科を専門にしてきた経験も生きました。同科では救急疾患を多く診ていたので、在宅での急変時の対応を判断しやすいのです。患者さんが病院に搬送された際にどんな治療や処置を受け、状態がどうなっていくかある程度予想できるので、患者さんやご家族の思いを踏まえて、「あえて送らない」という選択肢を考えることができます。

——在宅注力のクリニックとしてはスタッフが多く、なかでも常勤医と女性医師が多いことが特徴だと思いました。「女性医師が常勤医の半数近く」という構成は珍しいと思います。

当院は外来診療も行っており、外来では内科、小児科、皮膚科、脳神経外科と複数科を標榜しています。内科は今も年中無休で診療しているので、必然的に医師の数が必要になります。また、クリニックとしては在宅医療における診療やケアの一貫性を保つために多職種連携をなるべく院内で完結させたい思いがあるので、意図的に人を増やしてきました。

女性の医師が多いのはシンプルに以前から勤めていた人があまり辞めておらず、新規で女性の医師も加入するので比率が高まりました。在宅医療は女性医師の参入が進んでいない分野であり、それは緊急時の往診の可能性があるなどライフワークバランスを保ちにくいイメージがあるためだと思われるのですが、当院では医師に裁量権を委ね、フレキシブルに働けるようにしています。例えば、診療の合間でも仕事に差し支えなければ自宅に帰って食事の準備など家事をしても良いことにしています。平日の勤務時間内に仕事とプライベートを切り替えられるようにしているため、女性医師も働きやすいのではないのでしょうか。

——在宅注力クリニックなので、スタッフは多職種で成り立っているのでしょうか。

はい。理学療法士やケアマネジャーなども在籍しており、なかでも当院はソーシャルワーカーを重用していることが特徴です。この職種は在宅医療においてはとても重要であり、約80人のスタッフのうち10数人はワーカー経験者です。患者さんやご家族の最初の窓口となってさまざまなお話を伺う役割を担うため、チームとして患者さんに望ましい医療やケアのあり方を検討するにはソーシャルワーカーが得た情報が欠かせません。当院では院内の医師間の情報共有もソーシャルワーカーが仲介してくれることが多いので、院内外の情報のハブとして有機的に機能しています。

◆今井 浩平（いまい・こうへい）氏

2005年札幌医科大学医学部卒。市立釧路総合病院脳神経外科や帯広厚生病院脳神経外科、札幌医科大学脳神経外科講座などの勤務を経て、2011年に「ごう在宅クリニック」で在宅医療を開始。同年に開業し、「いまいホームケアクリニック」を開院。2017年に年中無休の体制で外来診療を始め、2021年11月にサービス付き高齢者向け住宅「HARELU宮の森」を開設した。日本脳神経外科学会専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

